

螢狩りの唄の地域多様性とその保存について

後藤好正（神奈川県横浜市）

はじめに

ホタルは夏の風物詩として親しまれてきた昆虫であり、ホタルが飛び交う時期ともなると団扇を手に、あるいは笹竹や菜種がらを結びつけた竿を手にしてホタルを追いかけた光景が見られた。こうした「螢狩り」は世情の安定してきた江戸時代以降に盛んになってきたのではないと思われるが、数ある昆虫の中で“○○狩り”と称されるのはホタルだけであり、紅葉狩り等と相通じる日本人のホタル観がうかがわれる。螢狩りの時には「螢狩りの唄」あるいは「螢唄」と呼ばれるわらべ唄が歌われていたが、ホタルの衰退とともに今日ではほとんど聞かれることもなくなってしまった。

螢狩りの唄について

螢狩りの唄はそのほとんどが、ラドレミの4音からなる陽旋法（田舎節）の曲であり、多くのわらべ唄同様、庶民の中から生まれたことは間違いないと思われるが、実際には何時頃から歌われ始めたのかは不明である。化成期（1800年代初頭）に栗田葛園が水戸地方のわらべ唄を集めた『弄鳩秘抄』に「螢とりの歌」として「ほうふたるこい山見てこいあんだのひかりをちよと見てこい」と出ているのが文献で確認される一番古い例であると思われる、次いで1831（天保2）年に刊行された小寺玉晃の『尾張童遊集』には「螢を見る時にいふ詞」として「螢 来い水のましょ、あっちの水はにがいよ、こっちの水はあまいよ」という唄が挙げられていて、この頃にはすでに一般に広く歌われていたのであろう。

こうした螢狩りの唄には地方ごとに特色のある唄が見られるが、三谷（1954）はこれらをおおよそ三つの系統、すなわち「山見て来い」形式、「昼は草場の露飲んで」形式、「あっちの水」形式に分類した。山本（1968）はさらにこれを四つに分類し、三谷の「山見

て来い」形式を「山路来い」型、「昼は草場の露飲んで」形式を「夜は提灯高登り」型と称し、新たに「水呉りゅう」型を設けている。実際には三谷や山本の分類に当てはまらない歌詞も見られ、また、これらの形式が混合したものも少なくない（資料参照）。

また、遊戯唄が螢狩りの唄として使われている例もあり、高知県に伝わる

向こう山でちらと光るは月か星か螢か
お月さんなら拝みましょうが
螢さんなら手に取る 手に取る

という唄は北原白秋編集の『日本伝承童謡集成』では動植物唄編におさめられている。同様な唄は群馬県渋川市や水上町、埼玉県越生町にも伝わっており、これらの土地ではお手玉唄や手鞠唄として歌われていた（酒井、1987：越生町教育委員会他編、1992）。一方、広島県高田郡向原地方では「あっちの水」形式の螢狩りの唄を子守唄としても歌っていたという（友久・原田、1984）。

螢狩りの唄の多様性と地域固有性

螢狩りの唄は「動植物の唄」の中では最も数が多いと言われており、北原白秋編『日本伝承童謡集成』には415曲が収録されているが、実際には林（1991）が岐阜県下で260曲を採譜したように、各地域で多彩な唄が歌われていた。たとえば神奈川県の綾瀬市深谷では同一地域内で、少しずつ異なった「あっちの水」形式の唄が歌われていた（綾瀬市秘書課市史編集係、1994）。こうした螢狩りの唄の多様性は、唄が歌い継がれていく中で、他の唄の伝播による混合や歌詞の変化、順番の入れ替え、欠落等が起こり、その土地その土地に固有の唄となっていったのである。また、旋律も似てはいるものの、こまかな違いが見られ、地域ごとに多様な曲を生み出している。

沖縄には日本本土とは違った独自のわらべ唄が見られるが、螢唄がいくつも伝わってい

る。これらの唄は最もよく知られ、沖縄一般で歌われるわらべ唄の一つであるという（久保けんお他、1980）。

螢狩りの唄の保存について

わらべ唄は口承により民間伝承されてきた文化であり、そのままでは消えてゆく運命を持っている。特に螢狩りの唄の場合はホタルそのものが身近な場所から姿を消していき、螢狩りができなくなっていったことが、こうした唄を歌う機会を無くし、忘れられていった要因の一つである。

地域ごとに特有なこれらの唄は、祖先が残してくれた貴重な文化遺産であり（町田・川崎、1962）、できうる限り保存・育成し、次世代に引き継いでいくことが、ホタルの棲める環境を保全・再生し、次世代に残して行くこと同様に、我々の義務ではないだろうか。

あわせて早急に新たな螢狩りの唄を採譜することが望まれる。実際にはこれから新たに採譜することは非常に難しい状況にある。しかし、今これを行わない限り永遠に失われてしまうことは間違いない。特に文献に残っているものの多くは歌詞だけのことが多く、旋律を譜面に残すことが重要である。地域のわらべ唄の研究者などが採譜されている可能性もあるので、そうした方をあたって見るのもひとつの方法であるかもしれない。

螢狩りの唄の活用について

林（1991）は「一時期消えてしまったかと思われたほたるが、あちこちで見られるようになったというニュースが入ります。しかし、ほたるの歌が復活したということは聞きません。」と述べているが、これまでのホタルの保護運動や再生活動は環境や教育、あるいは地域の活性化という面が取り上げられ、文化的な側面は置き去りにされてきた感がある。今後、各地で行われているホタルまつり等でその地域特有の螢狩りの唄を紹介したり、ホタ

ルを取り入れた教育活動を行っている学校では、音楽の時間にその地域特有の螢狩りの唄を教えるといった試みが行われることにより、ホタル文化もまた継承されていくのではないだろうか。

おわりに

わらべ唄は音楽的にも強固な民族性を持った伝承文化であり、その中でも螢狩りの唄は螢狩りという一つの文化と結びついて伝わってきたホタル文化の象徴である。その唄の地域固有性や多様性は、ゲンジボタルの遺伝的な地域固有性・多様性にけっしてひけをとらない興味深いテーマであり、ぜひ各地でホタルのさまざまな活動の中で取り組んでいただければと思う。

中国や朝鮮半島にも、子ども達が歌う螢唄が伝わっており、東アジアにおけるホタル文化を考える格好の材料でもある。

文 献

- 綾瀬市秘書課市史編集係編 1994, 綾瀬市民俗調査報告書3 - 深谷の民俗 -。綾瀬市。
- 林 友男 1991, 岐阜のわらべうた いま・むかし。自刊。
- 北原白秋編 1949, 日本伝承童謡集成 第二巻 天体気象・動植物唄編。三省堂。
- 久保けんお・杉本信夫・高江洲義寛 1980, 鹿児島 沖縄のわらべ唄。柳原書店。
- 町田嘉章・浅野健二編 1962, わらべうた 日本の伝承童謡。岩波書店。
- 三谷栄一 1954, 螢狩りの唄と田の神。日本民俗学, 2(1):25-53。
- 越生町教育委員会・共立女子大学日本民話研究会編 1992, おごせの昔話と伝説。
- 酒井正保 1987, 群馬のわらべ唄。柳原書店。
- 友久武文・原田宏司 1984, 広島島のわらべ唄。柳原書店。
- 山本孝哉 1968, 螢うた。昆虫と自然, 3(6):18-20。ニュー・サイエンス社。

資料

○ほうほう螢こい あっちの水は苦いぞ
こっちの水は甘いぞ ほうほう螢こい
「あっちの水」形式 (秋田県)

*

○ほうたるこい 山見てこい
行燈の光を 一寸見てこい
「山見て来い」形式 (東京都)

*

○ホーホーほたるこい 螢の親父は金持ちだ
夜は提灯高のぼり 昼間は草葉の露のんで
「昼は草葉の露のんで」形式 (栃木県)

*

○ホホ螢こい 谷川の水呉りゆう
谷川の水ア 要らんこんな
堀の水ちい呉りゆう ホホ螢こい
(佐賀県)

*

○ほたるこいこいこい
ほたるの虫は 親孝行虫で
親をたずねて こいこいこいこい
(千葉県)

*

○ほ ほ ほたる来い
ほたるどんの 嫁どりは
あんどんもいらぬ ちょうちんもいらぬ
けつあかりで とんで来い
(宮崎県)

*

○^{たあ}螢よ ^{たあ}螢よ
高飛びすなよ 低とびせえよ
(香川県)

*

○ほうしほうし ほったる来い
来い来い来い 螢るこという虫は
赤い鉢巻ねじあげて
けつに提灯ぶらさげて
(福井県)

*

○螢という虫は異な異な虫で
夜なべになると
ぴっちゃん かっちゃん 火をともす
(山梨県)

*

○ほたる ほたる
だんこぬけ ほたる
だんこぬけても 光ればええ
(岩手県)

*だんこぬけ=腰抜け

*

○^{ほうたる}螢さんはおいとしや
上さあがれば ^{つばくら}燕にのんまれる
下において露^は食め
(岩手県)

*

○ほいほい 螢という虫は
油のないのに灯をともす
ちんちくしょう ちんちくしょう
(和歌山県)

*

○ほ ほ ほたる来い
ほたるさんはいらんかい
赤いちょうちん 数えて
青いちょうちん 数えて
(広島県)

*

○螢来い 油がない
火も焚かぬ 字も出来ぬ
早く来い 早く来い
(長野県)

* * *

○じんじん ^{みじくワ}じんじん
酒屋ぬ 水喰てィ
落てィよ じんじん
下がりよう じんじん
(沖縄県)

*じんじん=ホタルの幼児語